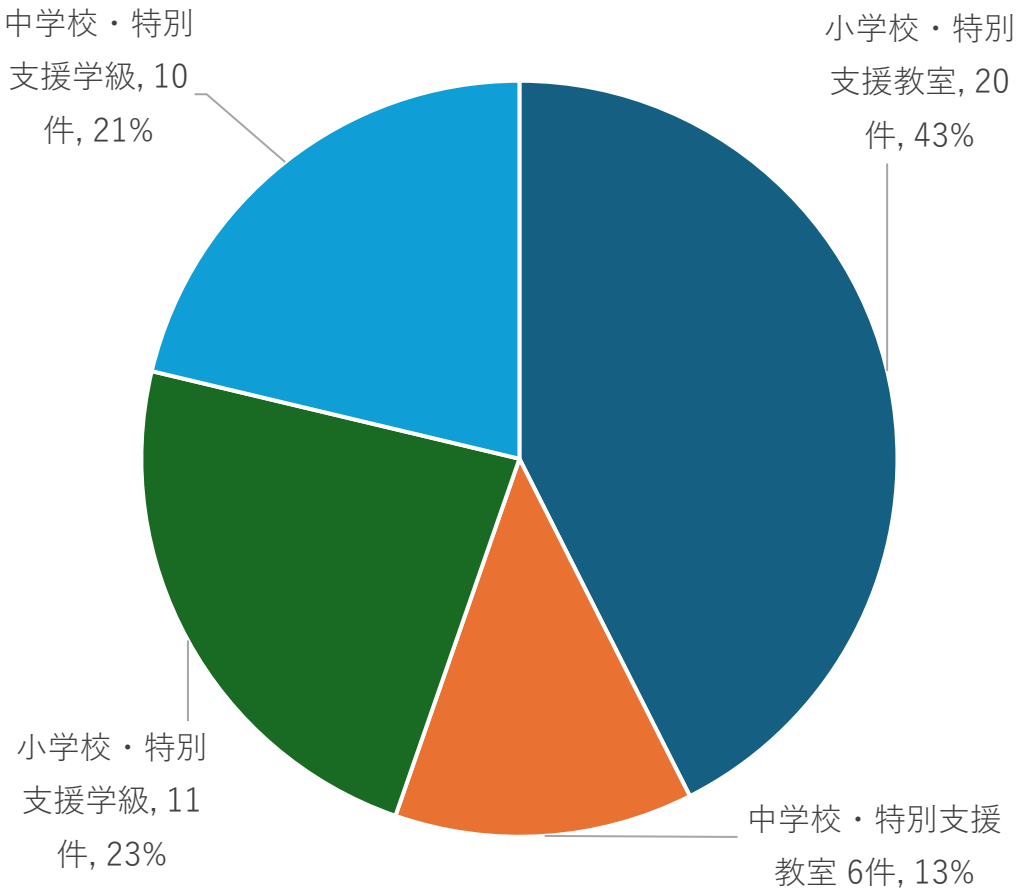
特別支援教育に対するアンケート

（担当教員）

1.担当している学級（教室）について

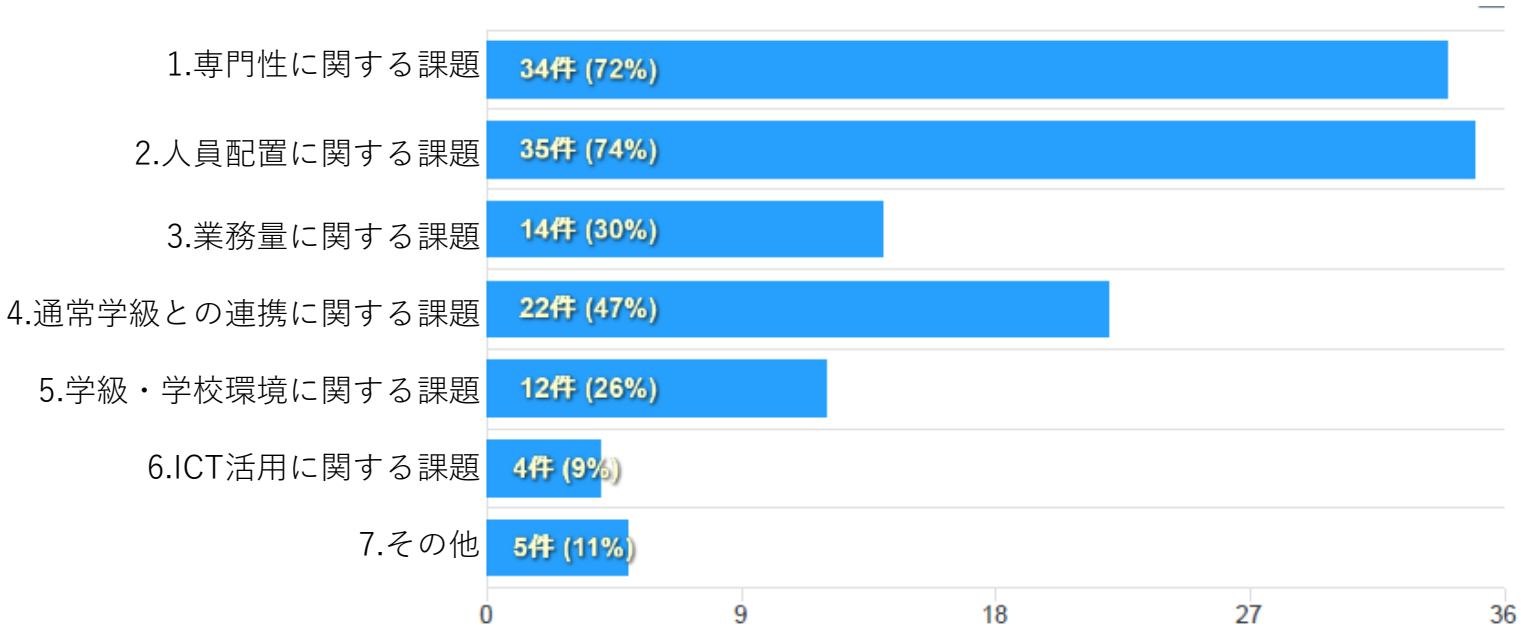
Q1.担当している学級（教室）をお答えください。



1.小学校・特別支援教室20件（43%）
2.中学校・特別支援教室6件（13%）
3.小学校・特別支援学級11（23%）
4.中学校・特別支援学級10件（21%）
合計：47件でした。

2.日頃感じている課題について

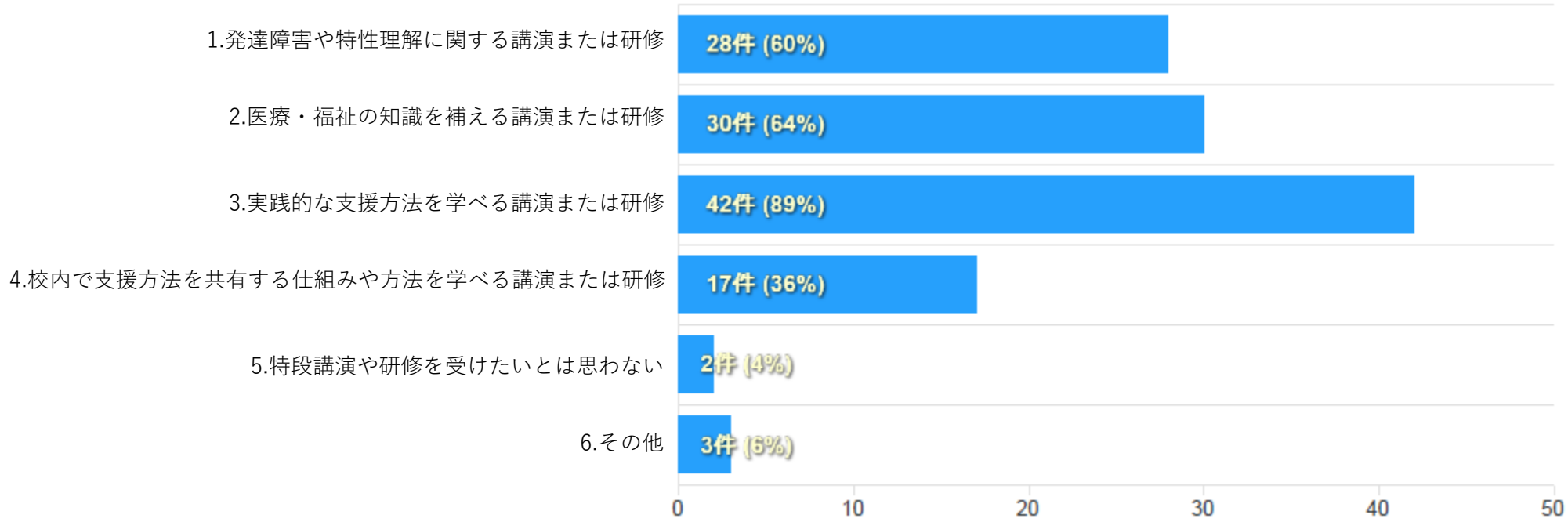
Q2.特別支援学級（教室）での指導や支援について、日頃感じている課題をお聞かせください。
（3つまで）



2.人員配置に関する課題が35件（74％）で最も多く、次いで、1.専門性に関する課題が34件（72％）でした。三番目に多かった意見は、4.通常学級との連携に関する課題22件（47％）でした。
その他の意見は、「親の考えへの配慮のし過ぎ」や「どこどこに繋げるためになどの適切でない理由で支援教室に繋げてしまうため、本来は支援教室のレベルではない子が入ってしまっている。」や、「運営方法や作成資料の書式など、業務全体に関わることの変更が、年度が始まってしばらく経ってから通達される。前年度の内にしてもらわないと対応が難しく、業務に支障をきたす。」「個に応じた必要な指導日数の確保」、「大変な児童を受け入れることへの確認不足」等、があげられていました。

3.特別支援学級（教室）における専門性や研修について

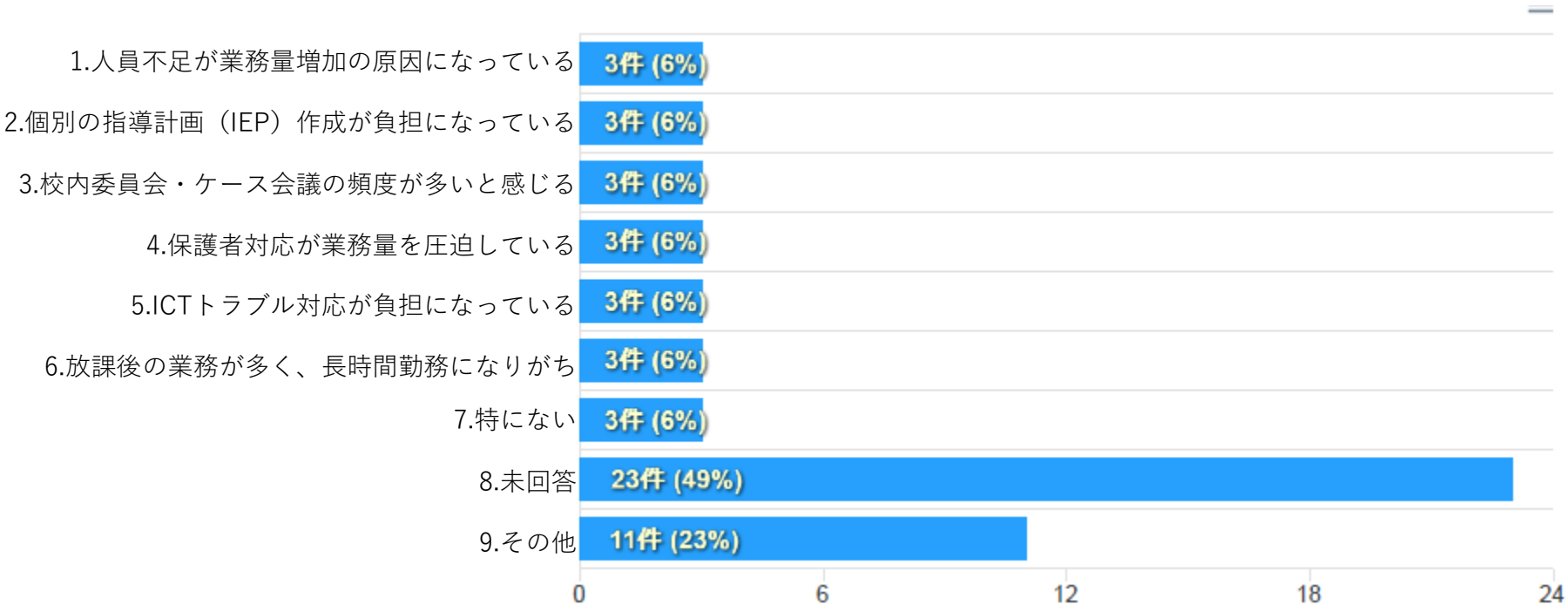
Q3.特別支援学級（教室）における専門性や研修について、受講したいと思う講演や研修についてお聞かせください。（3つまで）



3.実践的な支援方法を学べる講演または研修が42件（89%）で最も多く、次いで、2.医療・福祉の知識を補える講演または研修が30件（64%）でした。三番目に多かった意見は、1.発達障害や特性理解に関する講演または研修で、28件（60%）でした。その他の意見は、 WISC- Ⅴの読み取り研修や難聴・言語の専門性向上や指導・支援の研修、進路についての研修があげられていました。

4.特別支援教室（通級）の業務量について

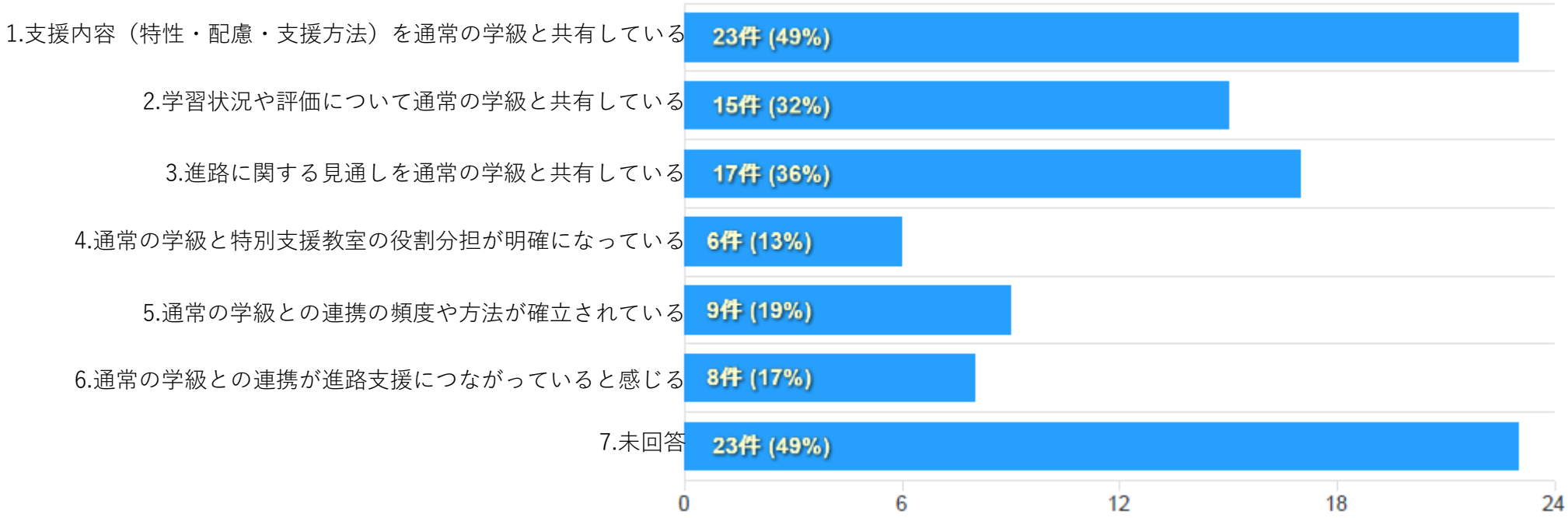
Q4.特別支援学級（教室）における業務量について、日頃感じていることをお聞かせください。（3つまで）



8.未回答が23件（49%）で最も多く、次いで、9.その他11件（23%）でした。1～7.までは全て3件（6%）でした。
その他の意見は、「介助員や教員が休んだ時の人数不足による負担」「個別指導計画作成について、現在は毎学期目標を立て、評価する形式だが、そんなに早く指導効果が出るわけではないので、年度内の目標・評価は2回ないし1回でよいと考えます。」「作成書類が多い。」「特別支援学級担任が特別支援教育コーディネーターの業務を担っていることが多いため、通常学級のことまで管理しなくてはならず、この負担がとても大きい。」等がありました。

5.特別支援教室の連携の在り方について

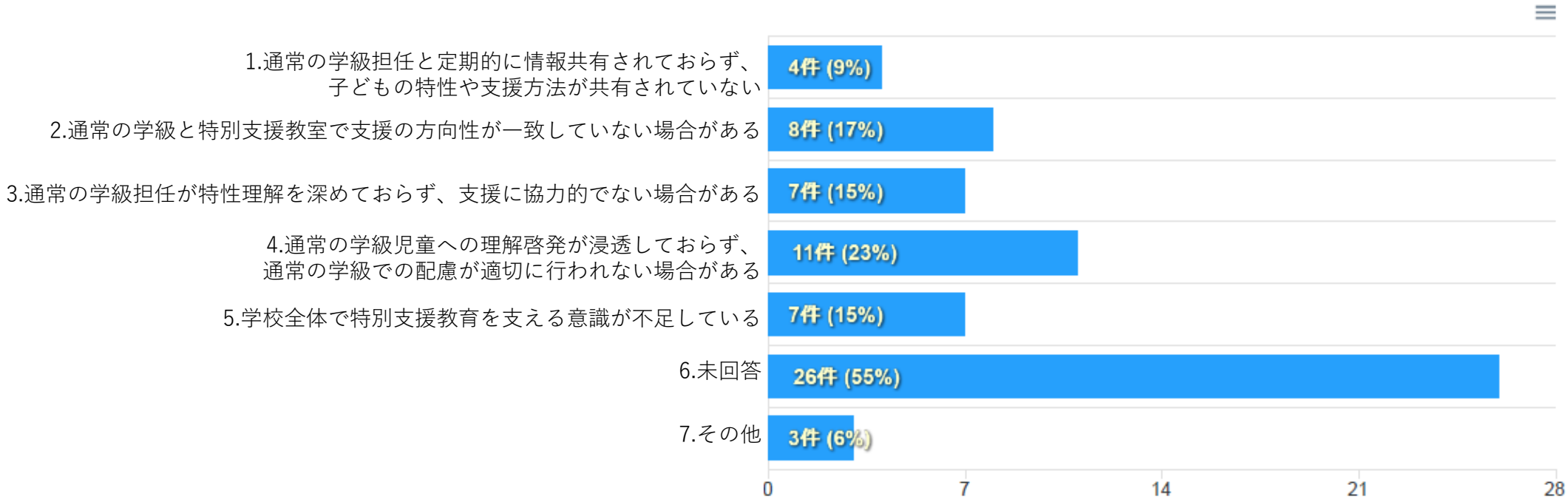
Q5.特別支援教室に関わっている教員の方のみお答えください。
特別支援教室として、通常の学級との連携の在り方について、あなたが当てはまると感じるものを選んでください。（3つまで）



1.支援内容（特性・配慮・支援方法）を通常の学校と共有しているが23件（49%）で最も多く、次いで、3.進路に関する見通しを通常の学級と共有しているが17件（36%）でした。三番目に多かった意見は、2.学習状況や評価について通常の学級と共有しているで、15件（32%）でした。

6.特別支援教室と通常の学級の連携における課題について

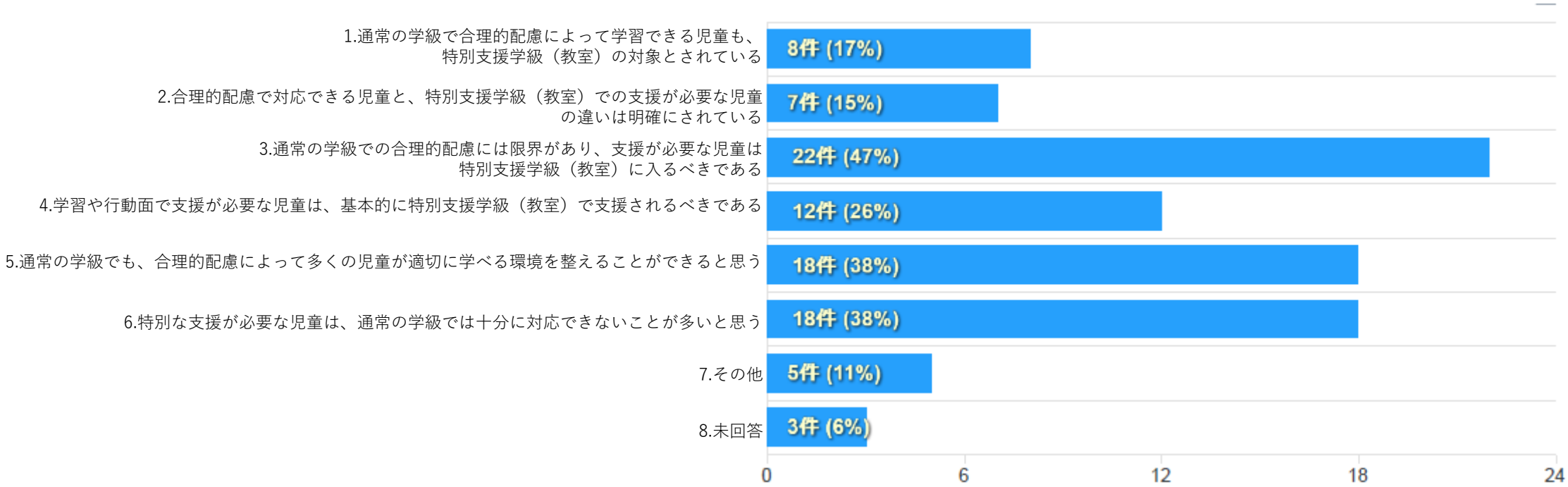
Q6.特別支援教室に関わっている教員の方のみお答えください。
特別支援教室と通常の学級との連携について、日頃感じている課題をお聞かせください。
（複数選択可）



アンケート結果から、未回答（55%）が最も多くなりました。一方で、特別支援教室と通常学級との連携において、通常学級児童への理解啓発の不足（23%）、支援の方向性の不一致（17%）、通常学級担任の特性理解不足（15%）でした。

7.通常の学級と特別支援学級（教室）の対象児童・生徒の範囲について

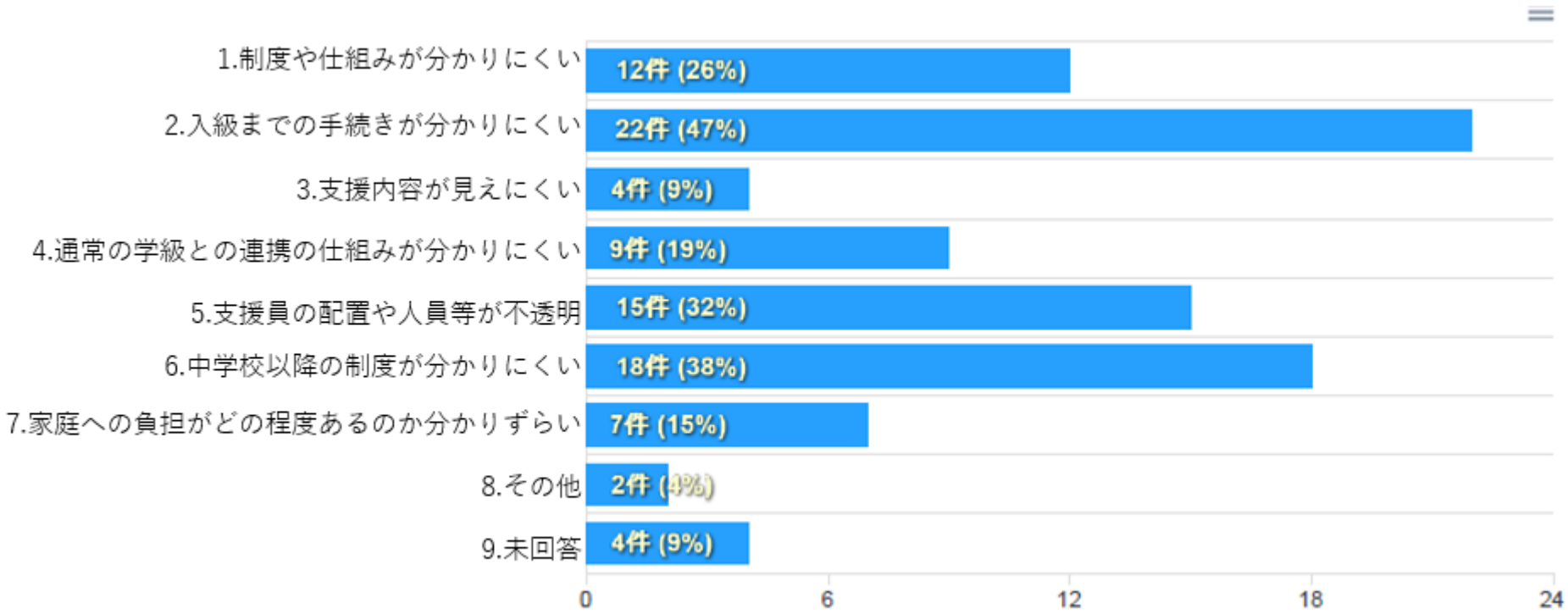
Q7.通常の学級と特別支援学級（教室）の対象児童・生徒の範囲について、日頃感じていることをお聞かせください。（3つまで選択可）



3.通常の学級での合理的配慮には限界があり、支援が必要な児童は特別支援学級（教室）に入るべきであるが22件（47%）で最も多く、次いで、5.通常の学級でも、合理的配慮によって多くの児童が適切に学べる環境を整えることができると思うと、6.特別な支援が必要な児童は、通常の学級では十分に対応できないことが多いと思うが同票で18件（38%）でした。

8.特別支援学級（教室）に関して、制度的に分かりにくいと感じる点について

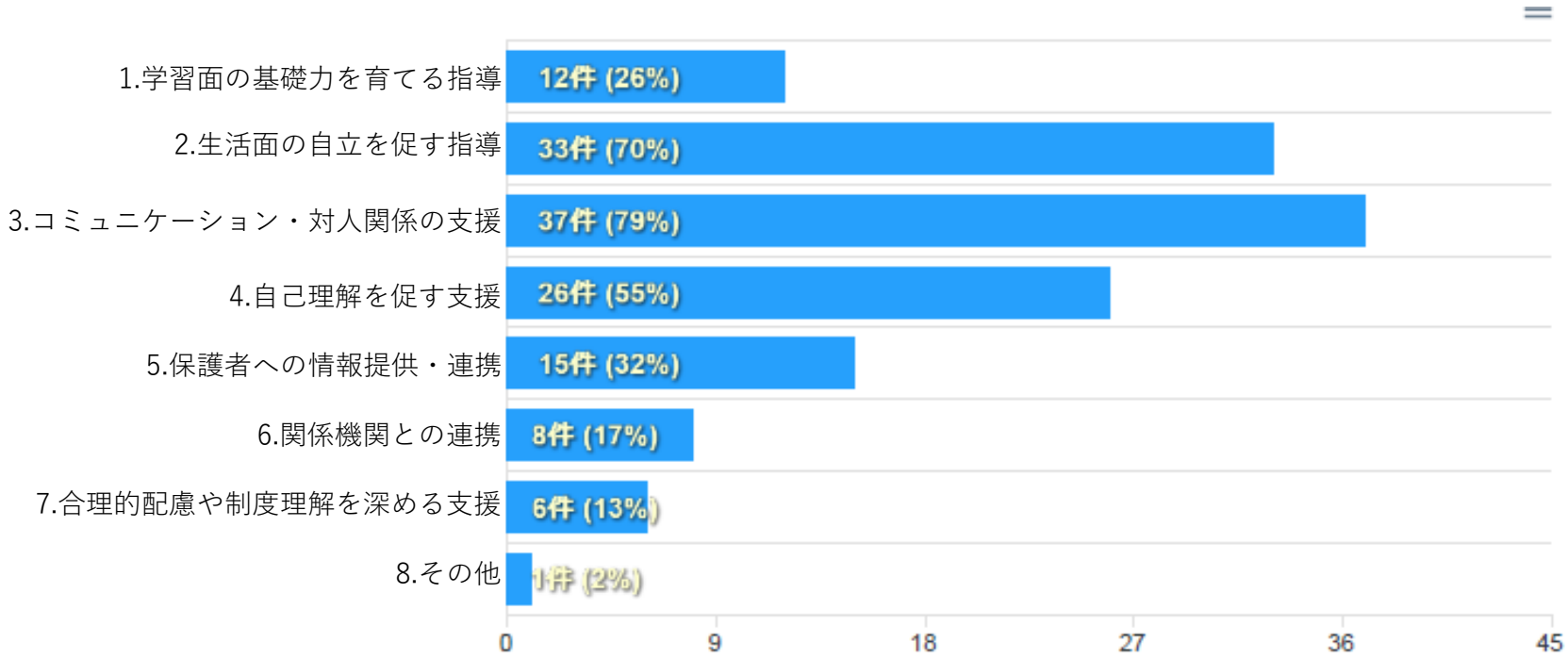
Q8.特別支援学級（教室）に関して、制度的に分かりにくいと感じる点があれば教えてください。（3つまで選択可）



アンケート結果から、特別支援学級・特別支援教室に関する制度的な分かりにくさとして、「入級までの手続きの不明瞭さ」（47%）、「中学校以降の制度の不透明さ」（38%）、「支援員配置の不透明さ」（32%）が主要な課題として示されました。自由記述では、判定の仕組みが地区によって異なることへの困惑、福祉サービスの案内不足、市としての制度情報の一元化などの意見がありました。

9. 児童・生徒の卒業後の進路に対する指導・支援について

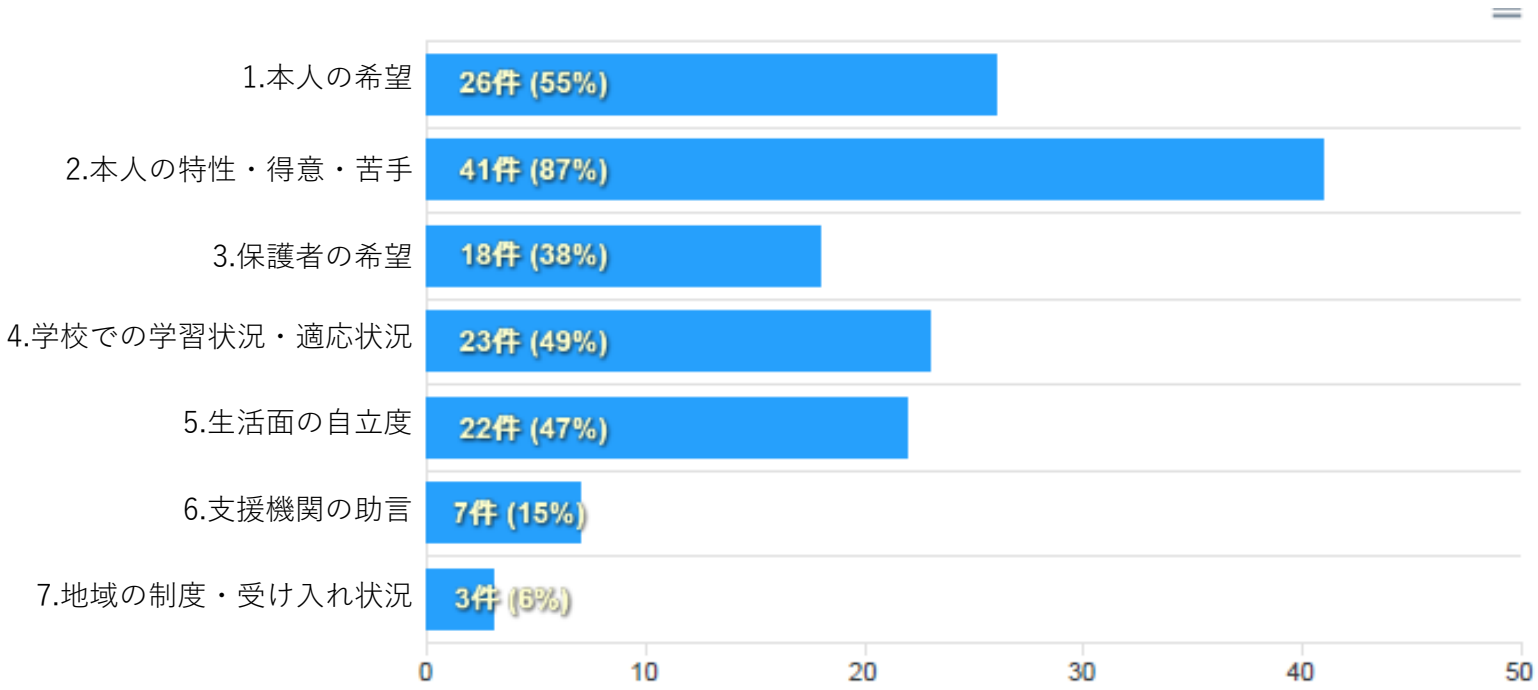
Q9.特別支援学級（教室）の児童・生徒の卒業後の進路を見据えて、あなたが重要だと考える指導・支援を３つまで選んでください。（3つまで選択可）



アンケートの結果から、卒業後の進路を見据えた指導・支援として、コミュニケーション・対人関係の支援（79%）、生活面の自立を促す指導（70%）、自己理解を促す支援（55%）が主要な領域として示されました。

10. 進路決定における意思決定について

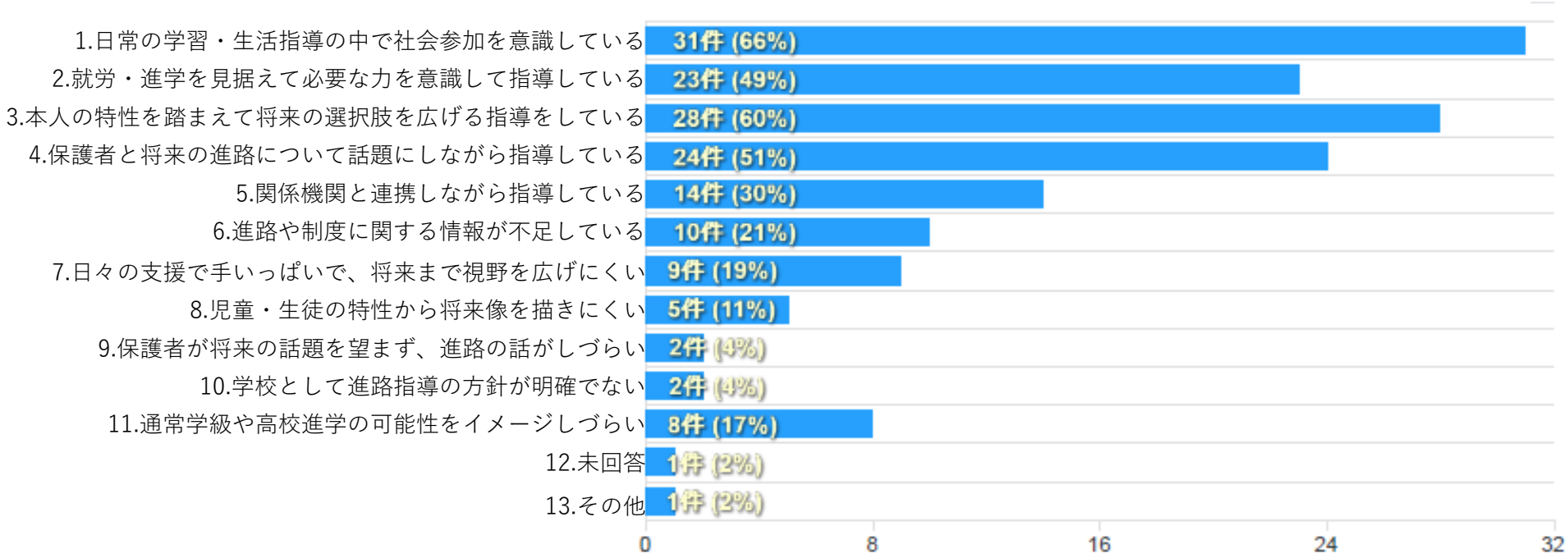
Q10.特別支援学級（教室）の児童・生徒の卒業後の進路を意思決定する際に、あなたが特に重視すべきと考える項目を３つまで選んでください。



アンケートの結果から、卒業後の進路の意思決定において、教員は「本人の特性・得意・苦手」（87%）を最も重視していることが明らかとなりました。次いで「本人の希望」（55%）、「学校での学習状況・適応状況」（49%）、「生活面の自立」（47%）が重要視されており、進路決定において“本人中心”の視点が強く示されました。

11.社会参加を見据えた指導について

Q11.特別支援学級（教室）の児童・生徒が将来社会に参加すること（就労・進学など）を見据えた指導について、あなたがどの程度意識して行えていると感じますか。（複数選択可）



アンケートの結果から、教員は日常の学習・生活指導の中で社会参加を意識している（66%）、本人の特性を踏まえて選択肢を広げる指導を行っている（60%）、保護者と進路について話題にしながら指導している（51%）という結果が示されました。一方で、「日々の支援で手いっぱいで将来まで視野を広げにくい」（19%）、進路や制度の情報不足（21%）、関係機関連携の弱さ（30%）などの結果が示されました。